

## 対人認知過程に関する一考察

### ——Dymondの共感性指標の検討——

岩 渕 次 郎      今 川 民 雄

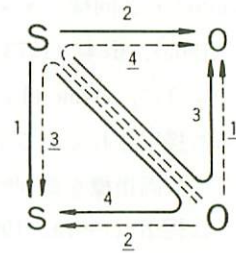
dyadicな対人認知場面での相互理解過程については多くの研究がみられ、なかでも社会心理学的アプローチからは、主として社会的相互作用と認知の正確さや歪みという文脈に沿って、また臨床心理学的アプローチでは、主に治療的人間関係における共感性の成立過程とパーソナリティという観点から、それぞれ知見が重ねられてきている。

自己(S)と他者(O)の二者間に交錯する基本的認知過程とそれらの関連は、表1・図1のように標示できるが、共感能力(empathic ability)の測定を試みたDymond, R. (1949, 1950)は、この図式中のS→(O→o), O→o 両過程にみられる評定差と、S→(O→s), O→s 両過程での評定差に着目し、この2種の評定差の加算値をもって共感能力の予測尺度(Sの共感能力は、この値に逆比例する)としたことから、多くの論議をひきおこした。そしてその中では、①彼女の手続きとそこで使われた性格特性次元で捉え得るものは、むしろ知的・認知的レベルでの予測能力であり、この予測尺度には、共感的性能としての affective な動きをも含めた他者の流動的な体験に対する鋭敏な感受性が反映していないこと (Allport, G.W., 1961), ②elevation・differential elevation

(表1) 各認知過程とその標示

認知過程	各過程の標示 (記号) (略号)	諸家の標示例 (梶田)(浜名他)(藤原他)
自己認知	S→s 「1」	S S-S'
他者認知	S→o 「2」	O S→O' S→O
相手の自己認知への推測	S→(O→o) 「3」	O <sub>s</sub>
相手の他者認知への推測	S→(O→s) 「4」	S <sub>o</sub> S←O'S←O
相手方の過程1	O→o 「1」	S'
相手方の過程2	O→s 「2」	O' S'←O S←O
相手方の過程3	O→(S→s) 「3」	
相手方の過程4	O→(S→o) 「4」	

(図1) 対人認知過程の図式



・ステレオタイプの正確度などの artifacts が混入して、妥当性に疑問が生ずること (Cronbach, L. J., 1955) など、の批判がその主調となっている。

同時にこれらの論議は、その後共感性そのものの概念規定に関しての一層本質的な討議へと連なり、また新しい視点から共感性を捉えようとする多彩な試みを促してきた。

しかし一方で、彼女が共感性指標として提唱した2種の認知過程対自体は、両者の意義をほとんど同質とみなした Dymond 自身の暗黙の前提に従って、その質的な異同についての検討がなされないままになっている。本小論は、Dymond の図式に従いながら、まず両認知過程対の意義を検討し、併せて両過程対の質的差異を比較吟味しようとするものである。

ところで、対人認知に関するこれまでの諸研究には、Dymond の着目した前記2種の認知過程対に基づいて理解できるものが少なくない。たとえば Truax, C. B. (1961) は、面接治療場面から録音したクライアントと治療者との会話テープを臨床専門家に聴かせ、両者の実際の応接を通して治療者の共感的理解度を評定させるという手続きによって、“accurate empathy scale”を開発した。そしてこの尺度で測定された治療者の共感性は、クライアントの改善と正の相関を示すことが、その後の研究で明かにされている。

Davitz, J. R. (1964) らは、同一文章が数種類の感情で表現された録音テープを用い、その感情を識別させる「情緒識別検査」から、被験者の共感能力を間接的に測定しようとしている。

また Cline, V. B. (1961) は、特定の刺戟状況におかれた人物の行動を、予め設定したいくつかの選択肢から選ばせる“Behavior Postdiction Test”によって、他者の行動に対する推測の正確度を測っている。

これらの研究は、いずれも主として Dymond の  $S \rightarrow (O \rightarrow o)$  と  $O \rightarrow o$  の認知過程対に立って、その一致度 ( $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$ ) と標示、以下各認知過程対の一致度は同じ要領で表わす) から共感性 (乃至認知の正確さ) を把握しようとするものといえよう。

他方、 $S \rightarrow (O \rightarrow s)$  と  $O \rightarrow s$  の一致度 ( $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$ ) に触れた研究では、好悪感情に基づく集団内での相互選択について論じた Tagiuri, R. ら (1953) のものが著明である。このなかで彼は、 $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  を対人認知の“accuracy”と呼んでいるが、同時に彼は、対人間の相互の好悪感情の認知で最も重要な要因は、これよりもむしろ“congruency” ( $S \rightarrow o$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow s)$  の一致度) であると主張している。

Tagiuri らと同様に  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  を accuracy の指標として扱った研究には、藤原 (1965)、根本 (1973) などのものがある。

このように、Dymond の共感性2指標は、関連諸研究のなかでそれぞれ視点を異にしながらも援用されているが、そこでは両指標のうちのいずれか一方のみが取扱われる場合が多く、両指標を並列的にとりあげその関連を論じたものは余りみられない。

僅かに梶田 (1967a, 1967b, 1968) は、基本的各認知過程 (表 1) に「理想の自己像」 ( $S \rightarrow Is$  と標示できよう) を加え、各認知過程対の一致度に及ぼす self-esteem・affect・

sex の各要因の効果について検討している。そして  $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  をともに “accuracy” の指標とみなしたうえで、この二者が self-esteem の影響を受けて異った様相を示すことを明らかにしている。このことは、両過程対を同質だとする Dymond の見解について改めて吟味の必要なことを示唆している。

以上のことから、ここでは  $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  及び  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  の意義について、とくに①両一致度の相互関連性、②各一致度と他の主要な認知過程対との関連、③認知者のパーソナリティ特性との関連などを通して考察を加えていく。

## 方 法

**実験手続** : 対象(本学2学年男子学生88人)に、各人の選択感情に基いて自由にペアを組ませたのち、表1の各対人認知過程に関してペア内での相互評定を行わせた。評定作業は集団施行とし、作業中は相互のコミュニケーションを禁じた。

認知過程の評定順序は、 $S \rightarrow s \cdot S \rightarrow o \cdot S \rightarrow (O \rightarrow o) \cdot S \rightarrow (O \rightarrow s)$  とし、評定は15項目の形容詞対からなる5段階性格評定表(後出図3参照)によるものとした。なおこれらの形容詞対は、飯島(1961)の対人印象形成語からその主要なものを選び、それを social desirability の観点からできるだけ方向を揃えて配列した。

実験に先立って、対象全員にY-G性格検査を集団施行し、その結果を対人認知の特徴とパーソナリティ特性との関連を吟味する際に利用した。

**結果の整理** : 対象のうち、ペア単位(一方または双方)での評定に何らかの欠落がみられたものを除外し、評定の完備した28組・56人の資料を分析の対象とした。

〈各認知過程対の一致度〉 各認知過程の間の一致度は、OsgoodのSD法に従い、各過程対の評定項目ごとの評定差(d)から、

$$\text{一致度} = \sqrt{\sum d_i^2} \quad (i=1, 2, \dots, 15) \text{ により求めた。}$$

〈Y-G性格検査〉 各認知過程対の一致度との関連を検討する際には、各尺度の粗点を利用した。

〈self-esteemの測定〉 Kajita(1968)との照合やバランス理論からの予測を検証するために、対象の特性にself-esteemの概念を加えた。すなわち、評定に用いた15項目中self-esteemに比較的関与するとおもわれる5項目(「あたたかい」・「しっかりした」・「頭のよい」・「魅力のある」・「誠実な」)についてなされた  $S \rightarrow s$  過程での評定に対して、段階値に応じて0～4点の得点を配し、その合計点(SE得点)によって全対象をself-esteemの高・低両群(H-SE・L-SE、各28人)に分割した。

## 結 果

**各認知過程対の相互関連** : 表2は、各認知過程の相互関連をさぐるために、Pear-

son の相関係数 ( $r$ ) を求めた結果である。これによれば、Dymond の 2 共感性指標、 $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  の間の相関は 0.201 ( $p > 0.05$ ) であって、両者間の関連の低いことがまずわかる。

(表 2) 各認知過程対の一致度の相互関連

	$S \rightarrow s : S \rightarrow (O \rightarrow s)$	$S \rightarrow s : O \rightarrow s$	$S \rightarrow s : O \rightarrow (S \rightarrow s)$	$S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$	$S \rightarrow o : S \rightarrow (O \rightarrow o)$	$S \rightarrow o : O \rightarrow o$	$S \rightarrow o : O \rightarrow (S \rightarrow o)$	$S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$
$S \rightarrow s : S \rightarrow (O \rightarrow s)$	1.000							
$S \rightarrow s : O \rightarrow s$	0.383***	1.000						
$S \rightarrow s : O \rightarrow (S \rightarrow s)$	0.336**	0.556***	1.000					
$S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$	0.170	0.456***	0.234	1.000				
$S \rightarrow o : S \rightarrow (O \rightarrow o)$	0.593***	0.196	0.313**	-0.046	1.000			
$S \rightarrow o : O \rightarrow o$	0.131	-0.133	0.075	0.119	0.299*	1.000		
$S \rightarrow o : O \rightarrow (S \rightarrow o)$	0.138	0.119	0.203	0.107	0.379***	0.456***	1.000	
$S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$	0.140	0.075	0.271*	0.201	0.181	0.556***	0.234	1.000

(\*  $p < 0.05$ , \*\*  $p < 0.025$ , \*\*\*  $p < 0.01$ )

ついで両指標と関連の高い過程対をさがすと、 $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  に対しては  $S \rightarrow o : O \rightarrow o$  ( $r = 0.556$ ,  $p < 0.01$ ) が、 $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  には  $S \rightarrow s : O \rightarrow s$  ( $r = 0.456$ ,  $p < 0.01$ ) が、有意に関連していることがわかる。このことから、 $S \rightarrow (O \rightarrow o)$  と  $S \rightarrow o$ 、および  $S \rightarrow (O \rightarrow s)$  と  $S \rightarrow s$  はそれぞれに高い類似を示すことが予測される。

このことについて Kajita は、両過程対が他の基本的認知過程対よりも、各々高い一致度を示すことを確かめて、これらの一致傾向を“consonance”と名づけている(のちに触れるごとく本研究でも、この 2 種の所謂「協和指標」は、Dymond の両共感性指標より高い一致度を示していた)。

$S \rightarrow (O \rightarrow o)$  と  $S \rightarrow o$  の一致とは、「私が彼についても *image* とほぼ同じものを、彼もまた彼自身に持っているようだ」という体験であり、また  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : S \rightarrow s$  は、「私が自分について抱いている *image* とほぼ同じものを、彼は私に対して感じているようだ」という体験である。これはどちらも他者の実際の認知内容との照合を欠いた、きわめて主観的・一方的な体験であって、容易に認知の歪み (projection, introjection など) を反映し易いという点では、正確性または共感性指標と明らかに異質といえよう。

さらに両協和指標間の相関は 0.593 ( $p < 0.01$ ) と、表 2 中で最も高く、自己を認知対象とした両過程 (認知と推測) で協和的認知傾向を示す者は、同時に他者を認知対象とした過程においてもこの傾向を示し易いことが知られる。

**各認知過程対とパーソナリティ特性との関連** : 表 3 は、各過程対のパーソナリティ特性との関連を、Y-G 性格検査の各尺度値との相関 ( $r$ ) を手がかりとして把握しようとしたものである。

ここでまず目立つのは、 $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  が、Y-G の D・C・I・N・O の各尺度と負の、また T 尺度とは正の有意な相関をもつことである。これは、情緒的に安定し、かつ思想的に外向であるほど、相手から自己に向けられた認知内容を、相手の認知枠に立

って推測できることを示している。

(表3) 各認知過程対の一致度とY-G各尺度得点との関連

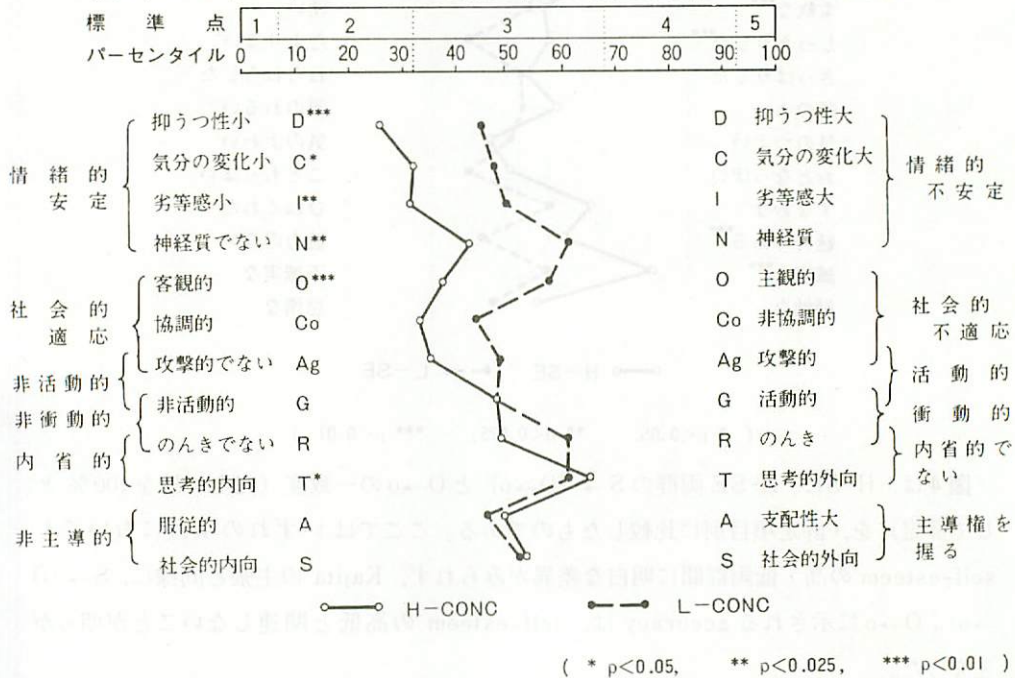
	S→s : S→(O→s)	S→s : O→s	S→s : O→(S→s)	S→(O→s): O→s	S→o : S→(O→o)	S→o : O→o	S→o : O→(S→o)	S→(O→o): O→o
D	0.004	-0.274*	-0.182	-0.430***	-0.084	0.006	-0.323**	-0.007
C	-0.057	-0.117	0.061	-0.275*	-0.212	0.056	-0.318**	-0.083
I	-0.128	-0.287*	-0.082	-0.346**	-0.186	0.142	-0.198	0.014
N	-0.055	-0.288*	-0.194	-0.348**	-0.182	0.072	-0.200	-0.075
O	-0.080	-0.379***	-0.143	-0.357**	-0.183	0.008	-0.174	0.013
Co	-0.102	0.017	0.095	-0.250	-0.134	0.133	-0.038	0.060
Ag	0.122	0.091	0.230	-0.132	0.056	0.075	0.211	-0.032
G	0.215	0.365***	0.319**	-0.129	0.036	0.004	0.010	0.093
R	0.220	0.000	0.381***	-0.209	0.145	-0.004	-0.140	0.057
T	0.212	0.194	0.316**	0.277*	0.017	0.046	0.138	0.184
A	0.295*	0.184	0.299*	0.073	0.103	-0.139	0.086	-0.082
S	0.202	0.136	0.235	0.021	0.158	-0.115	-0.049	-0.037

( \* p<0.05, \*\* p<0.025, \*\*\* p<0.01 )

しかし他方, S→(O→o):O→oの指標は, これと対照的にY-G尺度のいずれとも無相関であり, 相手自身の自己認知の内容を, 相手の認知枠に立って推測する能力は, 少なくともY-G性格検査によって測定される性格特性と何ら関連をもたないことがわかる。

図2は, 対象をS→(O→s):O→sに関して高一一致(H-CONC)・低一致(L-CONC)両群に分け, そのY-G平均プロフィールを比べたものである。両者ともA typeの類型内にあるが, そのなかでも高一一致群は, より上左寄り・下右寄りの特徴をもち, D typeへの近似傾向をみせている。

(図2) S→(O→s):O→sの一致度に関する高・低両群のY-Gプロフィール



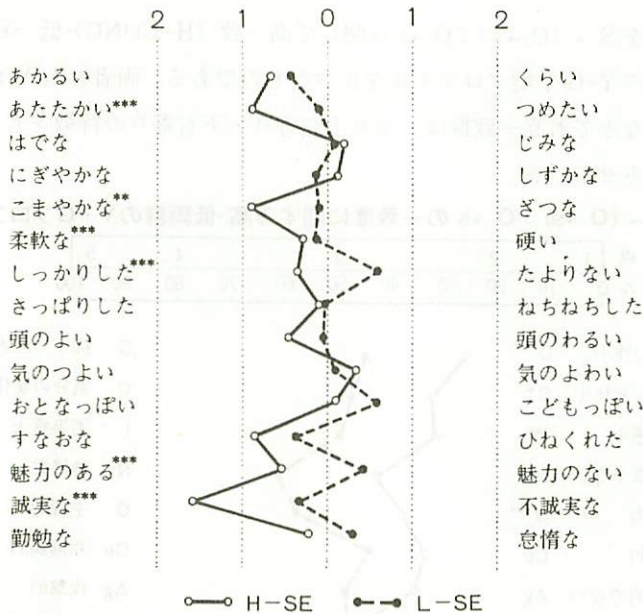
また表3によれば, S→sとO→sの一致度と, D・I・N・O各尺度との間に負の, ま

たGとの間に正の相関がみられる。このことから、情緒的に安定し、かつ一般的活動性の高い者ほど、彼自身のS→s過程が他者に理解され易い傾向をもつことが予想される。

これと関連して、S→s:O→(S→s)もまたY-G性格検査とのかかわりが高く、G・R・T・A(衝動性、内省性、主導性諸因子)と有意な相関を示している。このことは、他者に対して積極的に自己を表出する(自己開示的)傾向の高い者ほど、他者によってその自己認知像が的確に推測され得ることを示唆している。

図3は、self-esteemに関する高・低二群(H-SE, L-SE)の、S→s過程を比較したものである。H-SE群の評定は、15項目中12項目までがL-SE群よりも左寄りを示し、そのうち6項目では両群の中央値に有意差がみられた。さきに設定したSE得点は、SE指標として必ずしも充分ではないが、両群のプロフィルの差から、これがSEの高低の群別にある程度有効であったとおもわれる。

(図3) SE高・低両群のS→s過程比較



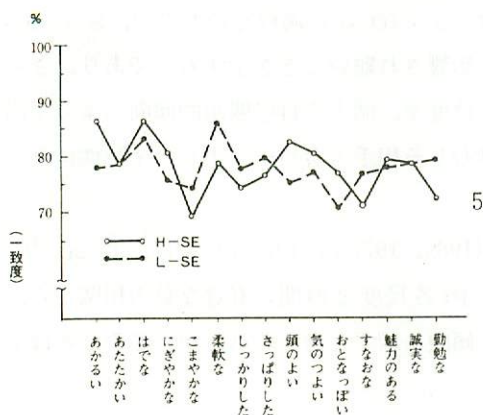
( \* p<0.05, \*\* p<0.025, \*\*\* p<0.01 )

図4は、H-SE・L-SE両群のS→(O→o)とO→oの一致度(完全一致を100%として算定)を、評定項目別に比較したものである。ここではいずれの項目においてもself-esteemの高・低両群間に明白な差異がみられず、Kajitaの主張と同様に、S→(O→o):O→oに示されるaccuracyは、self-esteemの高低と関連しないことが明らかとなった。

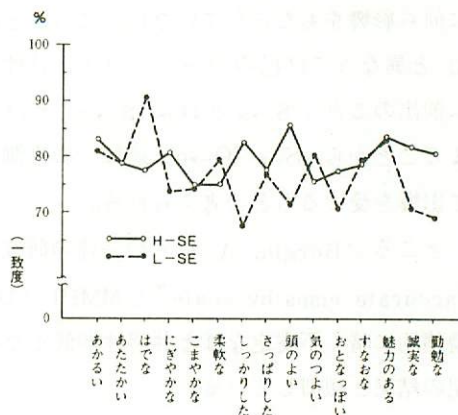
ついで、S→(O→s):O→sの一致を上と同様の手続きによって示したのが図5であ

る。ここでも self-esteem の高・低両群間に差がなく、これに群間差を認めた Kajita の結果とは異ったが、この点については考察で触れることとする。

(図4) SE高・低両群のS→(O→o) : O→oの一致度比較



(図5) SE高・低両群のS→(O→s) : O→sの一致度比較



なお、S→(O→o) と O→o との平均一致度は78.0% (H-SE 78.2%, L-SE 78.0%) S→(O→s) : O→s は77.7% (H-SE 79.5%, L-SE 76.0%) であった。これに対して、前出協和指標 (S→(O→o) : S→o および S→(O→s) : S→s) の各平均一致度は84.3%, 84.7%であって、共感性または認知の正確さの指標よりも高いことは前述のとおりであり、また両協和指標とも、self-esteem による群間差は認められなかった (前者 H-SE 82.5%, L-SE 86.1%, 後者 H-SE 83.0%, L-SE 86.5%)。

### 考 察

まず、本実験の結果は、Dymond が共感性の指標として用いた S→(O→o) : O→o と S→(O→s) : O→s との間には相関が認められず、両者がむしろ区別して扱われるべき認知過程対であることを明らかにしている。従って、Dymond の認知図式については、共感性の概念そのものについての論議や、正確さを定義する手続き上の問題につけ加えて、両認知過程対を同質のもののみなしてしまった点についても一層厳密な吟味が必要とされよう。

このことは、Dymond の共感性指標を対人認知の正確さの指標として用いた諸研究においてもあてはまる。たとえば Tagiuri らによる accuracy とは、S→(O→s) : O→s として図式化される「他者から自己へ向けられた好意の知覚」の正確さであり、また Scodel & Mussen (1953) が、非権威主義者が権威主義者よりも正確に認知するというときの正確さは、S→(O→o) : O→o の図式に沿った「相手の自己認知についての推測」の正しさをとりあげているのであって、これら2つの正確さの関連は何ら保証さ

れていないことを、本研究は示唆している。

ついで、 $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  とでは、Y-G 性格検査との関連で差がみられ、一般に情緒的な安定性や思考的外向性は、他者から自己に向けられた認知に対する推測の正確さを高めるが、一方他者自身の自己認知の内容を推測する際に何ら影響をもたらしていない。このことは、 $S \rightarrow (O \rightarrow o)$  過程そのものが、 $S \rightarrow (O \rightarrow s)$  と異なって自己のパーソナリティ特性に影響され難いことを示すものであり、さらに前出のごとく  $S \rightarrow s$  と  $O \rightarrow (S \rightarrow s)$  との一致度が、個人の自己開示的傾向によって高まることから、 $S \rightarrow (O \rightarrow o)$  過程での推測はむしろ相手方のパーソナリティ特性によって影響を受けるものと考えられる。

ところで Bergin, A. E らの一連の研究 (1969, 1971 a, 1971 b) では、Truax の "accurate empathy scale" と MMPI の D・Pt 各尺度との間の有意な負の相関から、情緒的に暗く不安定なほど共感性が低くなる傾向を示すと考えられたが、このことは上記の結果と類似している。

但しここで留意すべき点は、Truax の尺度が本研究において Y-G 各尺度との間に何ら関連を見出し得なかった認知過程対の一致度 ( $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$ ) に沿っていることである。Bergin らの研究と本研究との齟齬については、測定手続上の差異にも注目しながら検討すべき問題として残っている。

以上のことから、対人認知において正確さ乃至共感性を問題にする際は、認知過程が自己に関してなされたものか (self-oriented)、他者に関してなされたものか (other-oriented) についての区分をまず明確にしておくことが重要とおもわれる。

広く認知の対象の相違が認知過程の特質に影響するという視点に基づく研究は、蘭と狩野 (1975) によっても行われている。彼らは、Heider, F. (1958) の POX モデルに注目しながらも、このモデル中の X (第三の存在) は事象・人物いずれにも適用し得るとした Heider 自身の見解に疑問をもった。そして、事象を含む POX 構造と人物を含む POQ 構造とを比較検討するなかで、POX については、PX (P の事象 X に対する認知) と OX (P が推測した O の X に対する認知) との符号がその正負にかかわらず等しくなる傾向 (agreement 効果) が支配的であったのに対し、POQ では、PQ (P の人物 Q に対する認知) と OQ (P が推測した O の Q に対する認知) がともにマイナスとなる (所謂負の agreement) 構造が最も嫌われ (生起し難く)、正の agreement 構造が好まれる傾向を見出している。

さて、Dymond の 2 指標のうち  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  が、認知者の人格要因との関連をもつという点で、 $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  よりも一層重要な意義をもっていることについては、すでに触れたとおりである。ここでは、この指標についてさらに上記の POQ モデルを援用して検討を進め、とくに self-esteem 条件との関連をみることにする。



このPOQ構造に、Pには自己(S)を、Oには他者(O)を、さらに第三の存在Qに両者の認知対象としてのs(Sの客体部分)を導入すると、ほぼ本論における自己・他者二者間の認知構造が再現される(PQは $S \rightarrow s$ 、OQは $S \rightarrow (O \rightarrow s)$ 、POは $S \rightarrow o$ にあてはまる)。

ここで self-esteem の高低が、PQ( $S \rightarrow s$ )の符号(正負)と対応するものとの前提に立つと、このモデルから H-SE・L-SE 両群の $S \rightarrow (O \rightarrow s)$ と $S \rightarrow s$ の一致度に関して  $H-SE > L-SE$  の関係が予測されるが、本実験の結果では、H-SE の一致度が83.0%、L-SE で86.5%(両者の差は有意でない)となり、むしろ負の agreement 効果の介在が想定された。

両研究の結果にみられるこの差異は、①本実験での self-esteem の規定が必ずしも厳密になされていないこと、②二者関係の認知構造がPOQ構造になじまないこと、③蘭らが扱う認知水準が affective な(好悪)関係であるのに対して、本実験では水準をより包括的な人格次元にしていること、などに由来するとおもわれる。

Kajitaの研究は、人格次元に基づく二者間の認知過程を問題にしているが、そこでみられた $S \rightarrow (O \rightarrow s)$ と $S \rightarrow s$ との高い一致(consonance)は、両認知過程の間に正の agreement 効果だけでなく、負の効果も生じ得ることを示唆している(但し、self-esteemに関して、 $S \rightarrow (O \rightarrow s) : S \rightarrow s$ の一致度に有意水準に近い差がみられており、正の agreement 効果の優勢は支持されている)。

$S \rightarrow (O \rightarrow s) : S \rightarrow s$ が、本実験で想定されたごとく負の agreement 効果の影響も受けていると仮定すれば、 $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$ についてつぎのような推論が可能となる。すなわち、本実験のように各人の選択感情に基づく( $S \rightarrow o$ 過程が positive な)二者関係では、H-SE は $S \rightarrow (O \rightarrow s)$ をより positive に推測する傾向を示し、他方 L-SE はこれをより negative に推測する結果、両認知過程の一致度は  $H-SE > L-SE$  となることが予測される。

しかし本実験の結果では、両群の一致度が H-SE で78.2%、L-SE で78.0%となつて、ここに群間差をみることができなかつた。一方 Kajitaの研究においては、同じ指標について self-esteem の高低による有意差がみられており、上記の予測を支持している。これらの結果は、本研究での self-esteem の概念について改めて吟味の必要なこととともに、とくに $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$ 指標と認知者の人格要因との深い関連を示唆するものといえよう。

## 要 約

他者(O)自身の自己認知( $O \rightarrow o$ )とこれに関する自己(S)の推測( $S \rightarrow (O \rightarrow o)$ )との、および他者から自己に向けられた他者認知( $O \rightarrow s$ )とこれに関する自己の推

測 ( $S \rightarrow (O \rightarrow s)$ ) との各一致度 ( $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$ ,  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$ ) は, Dymond, R. の共感能力尺度のなかで同質の指標として取扱われてきたが, ここでは両指標の質的差異を, 他の基本的認知過程・認知者のパーソナリティ特性等との関連を通して比較検討してみた。

対象 (男子大学生56人) に自由にペアを組ませ (28組), Dymond の認知図式に沿った4種の認知過程についての相互評定 (15項目の性格形容詞を使用) を行わせ, 各認知過程間の関連を認知者の人格変数 (Y-G, self-esteem) と交絡させながら分析した。

結果の主要なものは, ①  $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  と  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  との間には有意な相関が認められず ( $r = 0.201$ ,  $p > 0.05$ ), 両指標自体の関連が低い。②  $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow s$  は  $S \rightarrow o : O \rightarrow o$  と, また  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  は  $S \rightarrow s : O \rightarrow s$  とそれぞれ有意に関連 ( $r = 0.556$ ,  $r = 0.456$ ) しているが, これは  $S \rightarrow (O \rightarrow o)$  と  $S \rightarrow o$ , および  $S \rightarrow (O \rightarrow s)$  と  $S \rightarrow s$  に高くみられる一致傾向 (Kajita の “consonance”) の影響によるものとおもわれる。③  $S \rightarrow (O \rightarrow s) : O \rightarrow s$  は, Y-G の情緒的安定性・思考的外向性と正の相関を示した。他方  $S \rightarrow (O \rightarrow o) : O \rightarrow o$  は Y-G のいかなる尺度とも関連を示さず, むしろ相手方の性格特性によって影響を受けるものとおもわれる。④ 認知者の self-esteem の高・低は, どちらの一致度にも差をもたらさないこと, などであった。

これらのことから, この両認知過程対は質的に異なった過程であるとみなされ, 対人認知研究でこれらを共感性乃至認知の正確さの指標として論ずるときには, 両指標の質的差異に関する顧慮が必要とおもわれた。

## 文 献

- Allport, G. W. *Pattern and growth in personality*. Holt, Rinehart and Winston, 1961.
- 蘭千寿, 狩野素朗, 対人認知場面における事象系と対人系のと均衡論的比較研究, 実験社会心理学研究 1975, 15, 98—107.
- Bergin, A. E. and Jasper, L. G. Correlates of empathy in psychotherapy: A replication. *J. abnorm. Psychol.* 1969, 74, 447—481.
- Bergin, A. E. and Solomon, S. Personality and performance correlates of empathic understanding in psychotherapy. In *New directions in client-centered therapy*. Boston; Houghton - Mifflin, 1970.
- Cline, V. B. Interpersonal Perception. *Prog. exp. Pers. Res.* 1961, 1, 221—84.
- Cronbach, L. J. Process affecting scores on “understanding of others” and “assumed similarity”. *Psychol. Bull.*, 1955, 52, 177—193.
- Davitz, J. R., et al. *The communication of emotional meaning*. McGraw - Hill, 1944.
- Dymond, R. A scale for the measurement of empathic ability. *J. consult. Psychol.*, 1949, 13, 127—133.
- Dymond, R. Personality and empathy. *J. consult. Psychol.*, 1950, 14, 343—350.
- 藤原 哲, 対人認知構造の研究 (Ⅲ) —対人態度の社会的共感性—. 心理学研究, 1965, 35, 277—287.
- Garfield, S. L. and Bergin, A. E. Personal therapy, outcome and some therapist variables. *Psychotherapy: Theory, research and practice*, 1971a, 8, 251—253.

- Garfield, S. L. and Bergin, A. E. Therapeutic conditions and outcome. *J. abnorm. Psychol.*, 1971b, 77, 108-114.
- Heider, F. *The psychology of interpersonal relations*. Wiley, 1958.
- 飯島婦佐子, 対人認知の構造についての因子分析的研究, 日本心理学会第25回大会発表論文集, 1961, 455.
- 梶田毅一, 自己評価と自己のパフォーマンスの評価, 心理学研究, 1967a, 38, 63-72.
- 梶田毅一, 他者についての概念化と対人感情, 心理学研究, 1967b, 38, 284-289.
- Kajita, E. Self-esteem, affect and interpersonal cognition. *Jap. psychol. Res.*, 1968, 10, 111-122.
- 根本橋夫, 対人認知に及ぼす Self-Esteemの影響 (I), 実験社会心理学研究, 1972, 12, 68-77.
- 根本橋夫, 対人認知に及ぼす Self-Esteemの影響 (II), 実験社会心理学研究, 1973, 13, 31-39.
- 大橋正夫, 選択行動と対人的知覚の研究 [II] -他の成員に対する態度の知覚, 心理学研究, 1956, 27, 193-203.
- Scodel, A. and Mussen, P. Social perception of authoritarians and non-authoritarians. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1953, 48, 81-88.
- Tagiuri, R. et al. Some determinants of the perception of positive and negative feelings in others. *J. abnorm. soc. Psychol.*, 1953, 48, 582-592.
- Truax, C. B. A scale for the measurement of accurate empathy. *Psychiatric Institute Bull.*, Wisconsin Psychiatric Institute, Univ. of Wisconsin, 1961, 1, 12.

(岩 渕 次 郎 旭川医科大学・心理学)

(今 川 民 雄 北海道教育大学・教育心理学)